

戦前の食生活において柿とミカンが主な果物であった

— 「聞き書・日本の食生活全集」の数量化による解析—

本間伸夫 立山千草

はじめに

聞き書・日本の食生活全集¹⁾の記述内容を数量化する試みを生鮮肉類とイモ類の消費状況の解析に応用した結果を前報^{2) 3)}にて報告し、その中で、いわゆる戦前の食生活において肉食では鶏肉が、イモ食では里芋が主役であったことなどを認めた。

本報では、その手法を果物類に適用し、ミカンなどの柑橘類と柿が主役であったこと、その柿の位置が今日では著しく低下していること、山野産品が重要な役割を占めていたことなど興味ある結果が得られ、数量化の手法が有効であることを確認することができたので報告する。

方 法

1. 分析方法

1-1 分析の対象とする資料

聞き書・日本の食生活全集（以下、聞き書）の都道府県版47巻、CD版、索引版2巻を対象¹⁾とした。加えて、2014、2017、2019年調査の家計調査の2人以上世帯あたり生鮮果物への支出金額と購入数量の値⁴⁾を約1世紀隔てた新旧比較の資料とした。

1-2 語彙の検索と分類

生鮮果物それぞれの名称でもって聞き書の既述について検索し、調査地点、入手方法と利用形態などを集録した。新旧の比較のため、原則として家計調査に合わせ、リンゴ、ミカン、他の柑橘、梨、ブドウ、柿、桃、西瓜、苺を主要な伝統果物として検索し分類した。地方名の多くは帰属が可能であったが、不明の場合にはその他の枠に属させた。なお、果物の呼称は紛れを避けるため、カタカナと漢字を用いた。

1-3 聞き書からの検出で得られる数値

以下の数値の内容は、いずれも前報²⁾に準じている。

検出地点数とは、用語（果物の名称）を聞き書から検出することができた調査地点の数を示す。

検出地点比とは、都道府県ごとに得られた検出地点数を各都道府県に割り当てられている調査地点数で割った値を示す。この値は、地域の食生活とその食材である果物との関わりを都道府県単位で表しているものとして、統計分析と考察に用いた。なお、検出地点の全国合計値は296である。

1-4 東西の地域性

代表的な地域性として東西を取り上げ、中部地方以東を東日本、近畿地方以西を西日本とした。なお、自然環境を絡めた考察の場合、東北から南西へと弧状に分布する日本列島の東部が北に、西部が南に位置していることから、相対的に東日本は冷涼、西日本は温暖であるものとした。なお、地域性の東西間の差異の有無をもって、調査事象の国内での分布が均一であるか否かの判断の拠り所の一つとした。

結果および考察

1. 戦前における伝統果物の検出地点

表1に示されている検出地点数合計1217は、既報の食肉類474²⁾とイモ類1011³⁾を超えていることから、いわゆる戦前の食生活では果物類の消費がかなり活発であったものと推定される。

検出地点比の平均値は、当該果物の都道府県ごとの検出地点比を表している。例えば、表1において最高値0.932を示している「他の柑橘類」は1に近い値であるので、1検出地点あたり1件に近い頻度でもって検出されていることになる。

表1 聞き書・伝統果物の検出地点と東西比較

果物種類	検出地点数	検出地点比		東西比較
		平均値	割合%	
リンゴ	58	0.196	4.77	>
ミカン	179	0.605	14.71	<
他の柑橘類	269	0.932	22.10	<
梨	83	0.280	6.82	=
ブドウ	89	0.301	7.31	=
柿	245	0.828	20.13	=
桃	60	0.203	4.93	=
西瓜	131	0.443	10.76	<
苺	103	0.348	8.46	=
検出地点数合計	1217			
検出地点比平均		0.460		=

注 東西比較の列にある記号はすべて、 $P < 0.05$ でもって、>は東日本がより大、<は西日本がより大、=は有意の差異が認められないこと、を示している。この注は以下の表にも適用する

2. 戦前における主要果物の入手と利用

表2に、伝統的な主要果物の入手法と利用先を示したが、その中で最も注目値するのは、自然またはそれに近い状態にあるものに頼っている割合が極めて大きいこと、である。

表2における「買貴」は購入と貴いを表しているが大部分は購入であり、ミカンの値が突出している。これは、冬期の貴重な果物として広く全国的に普及しているが、その中に、自らの地域では生産されないため購入せざるをえない地域を多数抱える東日本が含まれているため、と判断される。

「屋敷」とは、宅地や耕作地周辺に生えている草木から得られるものを意味し、その大部分は木本のリンゴ、柑

ほんま のぶお

〒950-0813 新潟市東区大形本町2-3-28 (自宅)

たてやま ちぐさ

〒950-8680 新潟市東区海老ヶ瀬471 新潟県立大学

表2 聞き書・伝統果物8種の入手法と利用先

果物種類	入手法				利用先		
	栽培	屋敷	山野	買貰	慶弔	日常	加工
検出地点比							
リンゴ	0.014	0.053	0.000	0.027	0.176	0.052	0.017
ミカン	0.034	0.156	0.000	0.571	0.537	0.609	0.087
梨	0.035	0.113	0.099	0.124	0.145	0.166	0.000
ブドウ	0.025	0.038	0.208	0.062	0.093	0.258	0.051
柿	0.065	0.756	0.006	0.044	0.850	0.637	0.500
桃	0.008	0.179	0.000	0.020	0.038	0.183	0.000
西瓜	0.388	0.000	0.000	0.052	0.441	0.262	0.024
苺	0.019	0.007	0.304	0.011	0.000	0.349	0.009
果物ごとの割合%							
リンゴ	14.604	56.414	0.000	28.982	71.834	21.131	7.034
ミカン	4.519	20.522	0.000	74.959	43.546	49.403	7.051
梨	9.405	30.470	26.762	33.363	46.666	53.334	0.000
ブドウ	7.412	11.373	62.426	18.789	23.140	64.108	12.752
柿	7.422	86.804	0.698	5.076	42.775	32.061	25.164
桃	3.849	86.561	0.000	9.591	17.112	82.888	0.000
西瓜	88.190	0.000	0.000	11.820	60.707	35.997	3.296
苺	5.542	2.027	89.202	3.230	0.000	97.523	2.477

注「買貰」の内容は購入と贈答。

橘類、梨、ブドウ、柿、桃の果実であり、木イチゴ類も含まれ、柿が際だって多い。多くは販売目的ではなく自家用であり、樹は半自然の放任状態に置かれているケースが大部分を占めている。

「栽培」は栽培で得られたものの一部が自家用に流用されたもので、放任できない草本に限られ、西瓜の大部分と苺の一部が含まれている。

逆に、「山野」は自然状態にある草木から得られる果物であるが、ほとんどが木本の果実である。これらのうち、ブドウが突出している。

2-1 リンゴ

表1の検出地点比の値は全体として小さいので食生活との関わりが低い。特に、その生育に冷涼の地を好むことから、表1の東西地域性の比較では東>西であり、西日本への普及が遅れていることを示している。リンゴにとって、聞き書の時代は新規から伝統への過渡期に相当している。

2-2 ミカンを含めた柑橘類

表1に示すように、ミカンと他の柑橘類の検出地点の合計値は最高である。ミカンの他に酸(ス)ミカン類を

表3 聞き書・伝統果物の検出地点数と地点比

分類	項目	検出		東西比較
		地点数合計	地点比平均	
リンゴ	正月に	4	0.015	=
	お盆に	8	0.025	>
	月見に	5	0.015	>
柑橘類	夏ミカン	45	0.159	>
	柚子	122	0.418	=
	スダチ	7	0.023	<
	カボス	6	0.019	=
	ダイダイ	67	0.234	<
	金柑	22	0.079	<
	酸みかん類	202	0.691	<
	雑柑類	269	0.932	<
	ブドウ	山野産のもの	52	0.190
葡萄酒の醸造		9	0.032	>
柿	甘柿	185	0.629	=
	渋柿	223	0.758	=
	そのまま食べる	171	0.592	<
	熟しを待って	50	0.184	<
	さわしてから	97	0.328	=
	干し柿に加工	211	0.720	=
	柿皮を漬物に入れる	99	0.340	=
	料理の材料にする	107	0.375	=
	正月に	118	0.415	<
	お盆に	18	0.067	<
月見に	36	0.124	=	
イチゴ	山野産のもの	95	0.304	=

含む多様な雑柑類が存在していること(表3)から、何らかの柑橘がかなり以前から日本に定着していたものと考えられる。

このグループは生育に温暖な環境を好むので、表1と表3から、西日本での検出地点比の値が有意性の有無を問わず、おしなべて高いことが認められる。

他の果物に比してミカンの「買貰」の割合が飛び抜けているのは、正月を含む冬期の貴重な果物として全国的に消費が普及しているが、その全国の中に栽培不可能のため購入しなければ入手できない東日本の冷涼地が含まれているためと考えられる。

2-3 梨

表1は、梨の消費が多くないこと、東西に差異が認められないことを示している。表2における入手先の山野の値は山ナシであり、ごく少数が検出されている。なお、洋ナシは認められなかった。

2-4 ブドウ

この果物の特徴は、表1に示すように検出地点比の値はさほど大ではないものの、表2、表3に示すように山野産の割合がごく高いことに尽きる。山野産については、東西に有意の差異が認められないものの平均値では東日本が多い。山ブドウからのワインの醸造は東日本、特に東北地方に数多く認められた。

2-5 柿

表1から、検出地点比は柑橘類に次ぐ高い位置にあるにも関わらず、表4に示しているように現代の消費量はかなり低くなり、衰退が著しく目立っている。その盛衰の激しさから注目に値する果物である。

聞き書の時代に柿が尊重された理由はかなり多彩である。まず、この樹の生育好適地は西日本から東北地方南部までであってかなり広範囲であること、木本である上に病虫害が少ないという点から管理が楽であること、未熟な時期には渋味があって食害が少ないこと、長い歴史を有することから品種や系統が多くなり環境や目的に合わせて容易に選択できること、強い甘味と緻密な肉質を有することでドライフルーツ作りに適していること、果実の色が鮮やかで庭木としても見栄えがすること、ビタミン類が豊富に含まれていることなどである。さらに、葉までが押し寿司などに利用されている。

表3が示しているように、検出地点比の値は渋柿が甘柿に勝っている。これは、干柿には渋柿がより適しているためである。干柿への加工は非常に多く、表2に示すように、他の果物の加工を圧倒し最高の値である。この干柿は保存性を生かして、正月の床の間飾りに不可欠なものとなっており、その他、お茶請けは勿論、料理や菓子作りなどに広く使われている。柿の樹を持っている家での干柿作りは大事な年中行事の一つになっていた。

珍しいのは、干柿作りで出る柿皮の利用であって、強い甘味を生かして、漬物などの甘味付けに、そのまま乾燥しておやつに、乾燥粉末にして砂糖代わりの甘味料となっている。

2-6 西瓜

表1のかなり高い検出地点比の値から、すでに戦前においてもかなり食べられていたものと考えられる。西瓜は草本植物であるので、栽培または「買貰」でのみ入手可能であり、事実、表2で示すように栽培物がほとんどである。東西比較から西日本に多いのは、栽培適性の影響と考えられる。お盆への出番が多い果物であるが、低温で

表4 家計調査・各種果物の消費支出金額と購入数量

果物種類	支出金額				購入数量			
	金額(円)	割合%		東西比較	数量(g)	割合%		東西比較
		伝統	全種類			伝統	全種類	
リンゴ	5096.17	21.96	14.29	>	12444.74	26.97	16.51	>
ミカン	4261.18	18.36	11.95	>	10745.65	23.29	14.25	=
他の柑橘類	2355.65	10.15	6.60	=	5634.21	12.21	7.47	<
梨	2056.10	8.86	5.76	=	4110.89	8.91	5.45	=
ブドウ	2626.67	11.32	7.36	=	2450.72	5.31	3.25	=
柿	1069.49	4.61	3.00	=	2829.53	6.13	3.75	<
桃	1209.33	5.21	3.39	>	1693.45	3.67	2.25	=
西瓜	1319.19	5.68	3.70	=	3854.28	8.35	5.11	=
苺	3217.27	13.86	9.02	>	2379.01	5.16	3.16	=
グレープフルーツ	279.77		0.78	>	890.51		1.18	>
オレンジ	572.23		1.60	>	1333.40		1.77	>
メロン	1051.58		2.95	>	1806.79		2.40	>
バナナ	4736.35		13.28	=	18367.62		24.37	=
キウイフルーツ	1602.49		4.49	>	1962.34		2.60	>
他の果物	4213.62		11.81	>	4879.39		6.47	>
上段伝統果物合計	23211.05			>	46142.50			>
下段新顔果物合計	12456.05			>	29240.04			>
全合計	35667.10			>	75382.54			>

は成熟が遅れてお盆に間に合わない場合が多いという。

2-7 苺

苺には栽培される草本のオランダ苺の他に野生のモイチゴ、草イチゴ類が含まれているので栽培物と自然物の両者があり、表1と表3は後者が圧倒的に多いことを示している。利用目的では行事とは無関係であって殆どが日常であることから、大部分が子供のおやつになっているものと推定される。

入手法から判断すると、山野産以外は極めて僅かであるので、聞き書の時代の苺は実際の食生活との関わりはごく僅かであって、今日とは雲泥の差があると判断される。

3. 戦後における果物の消費および戦前との比較

表4に、近年の果物の消費状況を家計調査3年分の平均値と東西の比較結果を示した。表4下段に表1にない新顔のグループが登場している。そのうちグレープフルーツとキウイフルーツは聞き書では検出されない。オレンジ、メロン、バナナは検出できるものの、件数が少ないことと伝統的果物でないので表1では取り上げていない。

このカタカナグループとでも名付けることができる新顔グループがかなり健闘していることが認められる。その合計値は、既に伝統グループの半分以上になっている。加えて興味を引くのが東西の比較において、カタカナグループの果物が例外なく西日本よりも東日本での消費が多いことである。その理由は分からないものの、文化の流れの方向の影響、を何となく感ずる。

表1と表4を比較した場合、最も興味を引くものは伝統果物の中で戦前戦後の約1世紀の間に起きた順位変動の大きさである。数量でもって直接の比較が不可能であるので、順位で考察することになるが、表4と表1の比較によって最も注目されるのは、リンゴと柿に見られる顕著な変動である。表1において検出地点比が最下位であったリンゴが、表4では金額数量ともに伝統果物中でトップになっている。逆に、表1でトップに近い地でもって2位にあった柿が表4では金額で最下位、数量で下位グループにまで降下している。金額において、バナナは別格にして、柿はすでに新顔のキウイフルーツに追い越され、メロンとほぼ同額となっている。

柿の著しい減少の理由を一語でいえば、取り巻いている環境がプラスからマイナスに変化したこと、である。

先に2-5の項で挙げた利点のほとんどがマイナスになっている。

日本の風土によく適合し、国内の広汎な地域の屋敷林などにあって半ば放任状態であっても容易に得られる、という利点が無意味になっている。都会化や過疎化でもって屋敷林が減少し、放任により大樹となった樹木からの収穫は困難となり、砂糖など甘味料が容易に入手できるようになって柿や干柿の持つ卓越した甘味の価値が低下し、日本で唯一と言ってよい優れたもののドライフルーツ干柿は保存技術の進歩と普及によりその優位性が減少している。

さらに決め手となるかと考えられるのが、人々が果物に持つイメージである。世界各地から様々な果物が輸入されることで、人々は果物のイメージの整理に迫られたのではないかと想像される。そしてイメージ整理の尺度となったのが甘酸のバランスと果物らしい香りではないかと考えられる。この点、リンゴは優等生であり、多様な甘酸バランスと香りメニューを用意している。対して、柿は酸味と香りがごく少ないことで極めて不利である。

しかし、多様性も現代の一つの姿である。例えば、さわし柿の持つえもいわれぬ独特の食感と単に甘いとだけでは表現できない味わいは高く評価できるので、画一的なイメージから離れた一つの領域を果物の中に確立していくものと考えられる。

ま と め

- 1) 肉類とイモ類について試みた聞き書の既述の数量化法を果物類(リンゴ、ミカンなどの柑橘、ブドウ、柿、梨、桃、西瓜、苺)に適用し、その可能性を再確認した。
- 2) 約1世紀間の動きを、数量化した聞き書のデータと現代の家計調査データを比較することにより、果物間に著しい順位変動が認められた。その変動は、リンゴと柿において顕著であった。
- 3) 柿の著しい順位変動に関して、その理由を考察した。
- 4) 聞き書の時代においては、山野産品がかなり重要な役割を果たしていた。特に、ブドウと苺において著しい。

参 考 文 献

- 1) 編集委員会：聞き書・日本の食生活全集(アイヌ版1巻を除く各都道府県版47巻,索引2巻),農文協(1982~1993)
- 2) 本間伸夫,立山千草:戦前における日本人の食肉嗜好を鶏肉が支えていた-「聞き書・日本の食生活全集」の記述データの数量化による解析-,新潟の生活文化, No27, p1,新潟県生活文化研究会(2021)
- 3) 本間伸夫,立山千草:戦前における日本人の食生活においてイモ類の主役は里芋であった-「聞き書・日本の食生活全集」の記述データの数量化による解析-,新潟の生活文化, No28, p5,新潟県生活文化研究会(2022)
- 4) 総務省統計局:家計調査年報<家計収支編>平成26年(2014),平成29年(2017),令和1年(2019),日本統計協会(2015~2020)